

『月宮庭園の恋人』

著：仙道はるか

ill：椎名咲月

閉め切っていた窓を開け、室内の空気を入れ換える。

春先の澄んだ外気が、部屋の中の澱(よど)んだ空気を浄化してくれるようで気持ちよかった。

「たまには、部屋の空気を入れ換えないとダメだって、いつも口煩く言ってるのに、どうしてやらないんだよ」

溜息をつきながら振り返った修二の視線の先には、大きな身体を申し訳なさそうに縮ませている親友の姿があった。

「……ごめん。なんか、すぐ忘れちゃうんだよね……」

そう言うと、修二の幼(おさな)馴(な)染(じ)みであり親友でもある京介は、困ったような表情で部屋の中を見回したのだった。

「まあ、部屋の換気や掃除は忘れてもいいけど、ご飯を食べるのまで忘れるのは、さすがにどうかと思うよ」

振り返った先の部屋の中は、外の爽(さわ)やかな空気とは裏腹に、雑然とした様相を呈していた。

正直、どうしてこれほどまでに短期間で散らかすことができるのか、毎度のことであったが修二は不思議でならない。

「原稿を書いていると、ついうっかりとお腹がすいていることを忘れるんだ」

叱られた子供のような顔で、京介はそう言った。

「もう、何度言っても聞かないんだから……。京介、今夜の夕食の残りは、全部冷蔵庫の中に入れたから、明日になったらちゃんと温めて食べてね。この間みたいに、三日間も飲まず食わずで倒れて、救急車で運ばれるようなことはしないでよ」

そう言うと、修二はこの部屋の主を振り返った。

午後にこのアパートを訪れてから、修二が真っ先にしたのは、キッチンの掃除だった。

その後に、今夜の夕食と、明日以降数日分の作り置きを料理した。

見事に散らかっている部屋の掃除よりも、まずは食べ物を用意することを優先したのは、京介が今日はまだ何も口にしていないと言ったからだった。

昨日の夕食は食べたのかと問えば、返ってきたのはかなり心許ない「たぶん……」の一言だったので、とりあえず部屋の惨状には目を瞑(つぶ)ることにしたのである。

「……う、うん、分かってる」

京介は百九十センチ近い長身を、心持ち小さくしながらコクコクと頷いていたが、その返事が当てにならないことは、修二が誰よりもよく理解していた。

「もう、本当に分かってるのか、俺、不安だよ……」

どうしてか分からないのだが、年々京介は修二に対して遠慮がちになっていくようだった。

(子供の時はカッコよかったのに……)

あの、自転車で土手を転げ落ちた自分を助けてくれた時の、優しくて頼り甲斐があっ

た京介は、いったいどこに？

思わず遠い眼差しになってしまうことも少なくなかったが、それでも修二にとって京介は、今も昔もヒーローだった。

普段どんなに情けなくても、いざという時に頼りになる彼が修二は好きなのだ。

しかし、その気持ちを京介に告げたことはない。

おそらく、この先もきっと告げることはないに違いない。

「修二、その……いつもありがとうな」

京介が申し訳なさそうな口調で礼を言うのに、修二は気にしないでと言って笑った。

「やだなあ、今さら何言ってるのさ。俺には遠慮はいらないってば。友達だろ？」

友達だと自分で口にするたびに、なぜだか胸が痛むようになったのは、いったいいつの頃からだろう……。

修二は、実はかなり早くから自分の京介への恋心を自覚していたのだが、この恋を成就させたいという気持ちはほとんどなかった。

それどころか、京介に早く素敵な恋人ができることを密かに祈ってさえいたのだった。

「う、うん……。でも、俺なんかとずっと仲よくしてくれて、すごく感謝しているんだ」

謙遜ならいいが、こういう時の京介の言葉は自分を本気で卑下している場合が多い。

修二は、どうしてそれほどまでに京介が自分をダメな人間だと思い込んでいるのか不思議であると同時に、悲しくて仕方がなかった。

(ちゃんと自分の意思で、一生懸命に夢を追ってる姿は、すごくカッコいいのに、どうしてそのことに気がつかないんだろう……？)

「……やめてよ。今度またそんなこと言ったら、本気で怒るからね」

せっかく修二が京介をカッコいいと思っているのに、本人にはまったく自覚がないのだから困ってしまう。

「……分かった。ごめん」

素直に謝る長身の友人に苦笑交じりの溜息を零(こぼ)すと、修二は「もういいよ」と言って京介のそばへ戻った。

「それで京介、今抱えている仕事の締め切りはいつなの？」

京介は現在、文学賞に投稿する傍らで、大学時代から続けている翻訳の仕事で食っている。

大学生の時はあくまでもバイトとして翻訳の仕事をしていたのだが、最近では贅(ぜい)沢(たく)さえしなければそれなりに生活をしていける程度には稼いでいた。

小説家になるまでの繋ぎの仕事のはずが、今ではほとんど本業として成り立つほどになっているのは、ある意味で皮肉なことだった。

「あ、この締め切りは再来週だから、まだ結構余裕はあるんだ」

仕事に余裕があるわりには、相変わらず部屋は散らかっているし、ご飯も食べていないし、髪の毛はぐちゃぐちゃだし、無精髭(ひげ)も生えている……。

もう少し身なりに気をつければいいのと思う反面で、京介にはずっとこのままでいてほしいと思ってしまうのは、修二の複雑な恋心のなせる業(わざ)なのかもしれないかった。

実は、京介はかなり整った顔立ちをしている。

中学生になってからかけるようになった黒縁の眼鏡と、伸ばしっぱなしの癖のある髪の毛と、まったく着る物に頓着しないせいで、女性からは敬遠されがちな京介だっ

たが、素顔はかなり精悍な顔立ちのハンサムなのだった。

背も高いし、スタイルもいいので、身綺麗にしてちゃんとした格好さえすれば、確実に京介は人目を惹(ひ)くに違いなかった。

しかし、京介が他人から評価されて認められるのは嬉しかったが、それと同時に、京介の魅力は自分だけが知っていればいいとも思う修二なのだった。

修二が京介と親しくなって、およそ十五年……。

その間に、修二がどれだけ葛藤したのか、おそらく京介には想像もつかないに違いない。

(京介と一緒にいることが辛い時もあるけど、それでもやっぱり傍にいたい……)

「なんだ、それならそうと言ってくれればいいのに……。てっきり、また締め切りギリギリで切羽詰まってると思ってたよ。そっか、仕事に余裕があるなら、今日は泊まっていこうかな」

修二は泊まる用意をしてきていなかったのだが、着替えも洗面道具も、一通り必要なものはすべて京介のアパートに置いてあった。

ようするに、それだけ頻繁に京介の部屋に泊まりに来ているということだった。

修二の職場が実家の近くでなければ、彼も家を出て京介と二人でアパートを借りてもよかったのだが、修二にとっては幸か不幸か、彼の勤務している小学校は実家から徒歩圏内だった。

これでは、独り暮らしをする理由が見つからない。

そのうち転勤することになるまでは、とりあえずは実家から通うしかなかった。

「え、泊まらないで、帰るつもりだったのか？」

明日が日曜日なこともあって、京介のほうは最初から修二が泊まっていくものだと思っていたらしかった。

「だって、まだ最終電車には余裕で間に合う時間だからね」

とはいえ、これから改めて京介の雑然とした部屋を片付けるとなると、それなりに時間はかかりそうだった。

それに、修二の頭の中には、この散らかった部屋をそのままにして帰るという選択肢はなかった。

「そんな、駄目だよ。こんな時間に夜道を一人で歩くのは危ないから、泊まっていきなよ」

まるで彼女にでも対するような京介の言葉に、修二は嬉しさを隠して唇を尖(とが)らせた。

「夜道の一人歩きっていわれても、俺だって一応は男なんだから大丈夫だよ」

口ではそう言ったものの、本心では京介に心配されるのは悪い気がしなかった。

「男だけど、修二は可愛いから心配だよ」

なんの含みもないと分かっているけど、京介に容姿を褒められるとドキドキする。

修二は、自分の少女めいた容姿をあまり好きではなかったのだが、それでも京介に褒められるのなら、この顔も悪くないと思うことができた。

「だから、二十五歳になる男に対して、可愛いはやめてっていつも言ってるだろ」

せっかく京介から可愛いと言われても、素直に嬉しいと言えないことが残念でならなかった。

「でも、昔からクラスの女子の誰よりも修二は可愛かった。今も可愛い」

あくまでも真剣な口調でそんなことを言う京介に、修二は小首を傾げてニッコリと微笑んだ。

「はいはい、分かりました。そうです、俺は可愛いです」

「ああ、修二は今も昔も可愛い」

せっかくわざと冗談めかした台詞を選んだというのに、肝心の京介が真顔では冗談にならなかった。

「……そこは、できれば否定してほしかったんだけど……」

「どうしてだ？ 事実なんだから、否定をする必要はないだろう」

あくまでも真剣な顔でそんなことを言う京介に、修二は溜息をつくことしかできなかった。

(まったく、人の気も知らないで……)

京介は修二のことを親友だと思ってきているのだろうが、彼に親友以上の気持ちを抱いている修二には、彼の無防備で罪のない言葉が時々辛かった。

本文 p33～40 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>